夏目漱石全集

1

筑摩書房

夏目漱石全集

1

筑摩書房

夏目漱石全集第一巻

昭和四十年十一月二十日　初版発行

著者　夏目漱石

発行者　東京都千代田区神田小川町二ノ八　古田晁

発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八　筑摩書房
電話東京(四)七六五一(代表)
振替東京四一二三

印刷　多田印刷株式会社
製本　美行製本有限会社

第一卷

目次

吾輩は猫である　三
倫敦塔　二七四
カーライル博物館　二八八
幻影の盾　二九四
琴のそら音　三一三
語注　三三三
解説　三六五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

夏目漱石全集　第一巻

吾輩は猫である

一

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか頓と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いて居た事丈は記憶して居る。吾輩はここで始めて人間というものを見た。然もあとで聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族であったそうだ。此書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。然し其当時は何という考もなかったから別段恐しいとも思わなかった。但彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じが有った許りである。掌の上で少し落ち付いて書生の顔を見たのが所謂人間というものの見始であろう。此時妙なものだと思った感じが今でも残って居る。第一毛を以て装飾されべき筈の顔がつるつるして丸で薬罐だ。其後猫にも大分逢ったがこんな片輪には一度も出会わした事がない。加之顔の真中が余りに突起して居る。そうして其穴の中から時々ぷうぷうと煙を吹く。どうも咽せぼくて実に弱った。是が人間の飲む煙草というものである事は漸く此頃知った。

此書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐って居ったが、暫くすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分丈が動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思って居ると、どさりと音がして眼から火が出た。夫迄は記憶して居るがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生は居ない。沢山居った兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠して仕舞った。其上今迄の所とは違って無暗に明るい。眼を明いて居られぬ位だ。果てな何でも容子が可笑しいと、のそのそ這い出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

漸くの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐ってどうしたらよかろうと考えて見た。別に是という分別も出ない。暫くして泣いたら書生が又迎に来てくれるかと考え付いた。ニャー、ニャーと試みにやって見たが誰も来ない。其内池の上をさらさらと風が渡って日が暮れかかる。腹が非常に減って来た。泣き度くても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所迄あるこうと決心をしてそろりそろりと池を左りに廻り始めた。どうも非常に

苦しい。そこを我慢して無理やりに這って行くと漸くの事で何となく人間臭い所へ出た。此所へ這入ったら、どうにかなると思って竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もし此竹垣が破れて居なかったなら、吾輩は遂に路傍に餓死したかも知れんのである。一*樹の蔭とはよく云ったものだ。此垣根の穴は今日に至る迄吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になって居る。偖邸へは忍び込んだものの是から先どうして善いか分らない。其内に暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降って来るという始末でもう一刻の猶予が出来なくなった。仕方がないから兎に角明るくて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から考えると其時は既に家の内に這入って居ったのだ。ここで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。第一に逢ったのがおさんである。是は前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した。いや是は駄目だと思ったから眼をねぶって運を天に任せて居た。然しひもじいのと寒いのにはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙を見て台所へ這い上った。すると間もなく又投げ出された。吾輩は投げ出されては這い上り、這い上っては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶して居る。其時におさんと云う者はつくづくいやになった。此間おさんの*三馬を偷んで此返報をしてやってから、やっと胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出され様としたときに、此家の主人が騒々しい何だといいながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けて此宿なしの小猫がいくら出しても出しても御台所へ上って来て困りますという。主人は鼻の下の黒い毛を撚りながら吾輩の顔を暫らく眺めて居ったが、やがてそんなら内へ置いてやれといったまま奥へ這入って仕舞った。主人は余り口を聞かぬ人と見えた。下女は口惜しそうに吾輩を台所へ抛り出した。かくして吾輩は遂に此家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書斎に這入ったぎり殆んど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思って居る。当人も勉強家であるかの如く見せて居る。然し実際はうちのものがいう様な勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書斎を覗いて見るが、彼はよく昼寝をして居る事がある。時々読みかけてある本の上に涎をたらして居る。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活潑な徴候をあらわして居る。其癖に大飯を食う。大飯を食った後で*タカヂヤスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。是が彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というものは実に楽なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝て居て勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。夫でも主人に云わせると教師程つらいものはないそうで彼は友

達が来る度に何とかかんとか不平を鳴らして居る。

吾輩が此家へ住み込んだ当時は、主人以外のものには甚だ不人望であった。どこへ行っても跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかった。如何に珍重されなかったかは、今日に至る迄名前さえつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍に居る事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が昼寝をするときは必ず其脊中に乗る。是はあながち主人が好きという訳ではないが別に構い手がなかったから已を得んのである。其後色々経験の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天気のよい昼は椽側へ寝る事とした。然し一番心持の好いのは夜に入ってここのうちの小供の寝床へもぐり込んで一所にねる事である。此小供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入って一間へ寝る。吾輩はいつでも彼等の中間に己れを容るべき余地を見出してどうにか、こうにか割り込むのであるが、運悪く小供の一人が眼を醒ますが最後大変な事になる。小供は――殊に小さい方が質がわるい――猫が来た来たといって夜中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神経胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現に先達て抔は物指で尻べたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を観察すればする程、彼等は我儘なものだと断言せざるを得ない様になった。殊に吾輩が時時同衾する小供の如きに至っては言語同断である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へっついの中へ押し込んだりする。而も吾輩の方で少しでも手出しを仕様ものなら家内総がかりで追い廻して迫害を加える。此間も一寸畳で爪を磨いだら細君が非常に怒ってそれから容易に座敷へ入れない。台所の板の間で他が顫えて居ても一向平気なものである。吾輩の尊敬する筋向の白君抔は逢う度毎に人間程不人情なものはないと言って居らるる。白君は先日玉の様な子猫を四疋産まれたのである。所がそこの家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持って行って四疋ながら棄てて来たそうだ。白君は涙を流して其一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戦って之を剿滅せねばならぬといわれた。一々尤の議論と思う。又隣りの三毛君抔は人間が所有権という事を解して居ないといって大に憤慨して居る。元来我々同族間では目刺の頭でも鰯の臍でも一番先に見付けたものが之を食う権利があるものとなって居る。もし相手が此規約を守らなければ腕力に訴えて善い位のものだ。然るに彼等人間は毫も此観念がないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼等の為に掠奪せらるるのである。彼等は其強力を頼んで正当に吾人が食い得べきものを奪って済して居る。白君は軍人の家に居り三毛君は代言の主人を持って居る。吾輩は教師の家に住んで居る丈、こんな事に関すると両君よりも寧ろ

楽天である。唯其日々々が何うにか斯うにか送られればよい。いくら人間だって、そういつ迄も栄える事もあるまい。まあ気を永く猫の時節を待つがよかろう。

我儘で思い出したから一寸吾輩の家の主人が此我儘で失敗した話をし様。元来此主人は何といって人に勝れて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやって*ほとゝぎすへ投書をしたり、新体詩を*明星へ出したり、間違いだらけの英文をかいたり、時によると弓に凝ったり、謡を習ったり、又あるときはヴイオリン抔をブーブー鳴らしたりするが、気の毒な事には、どれもこれも物になって居らん。其癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。*後架の中で謡をうたって、近所で後架先生と渾名をつけられて居るにも関せず一向平気なもので、矢張*是は平の宗盛にて候を繰返して居る。皆んながそら宗盛だと吹き出す位である。此主人がどういう考になったものか吾輩の住み込んでから一月許り後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあわただしく帰って来た。何を買って来たのかと思うと水彩絵具と毛筆と*ワットマンという紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心と見えた。果して翌日から当分の間というものは毎日々々書斎で昼寝もしないで絵許りかいて居る。然し其かき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。当人もあまり甘くないと思ったものか、ある日其友人で美学とかをやって居る人が来た時に下の様な話をして居るのを聞いた。

「どうも甘くかけないものだね。人のを見ると何でもない様だが自ら筆をとって見ると今更の様に六ずかしく感ずる」是は主人の述懐である。成程許りのない処だ。彼の友は金縁の眼鏡越に主人の顔を見ながら、「そう初めから上手にはかけないさ、第一室内の想像許りで画がかける訳のものではない。昔し以太利の大家アンドレア・デル・サルトが言った事がある。画をかくなら何でも自然其物を写せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに禽あり。走るに獣あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然は是一幅の大活画なりと。どうだ君も画らしい画をかこうと思うならちと写生をしたら」

「へえアンドレア・デル・サルトがそんな事をいった事があるかい。ちっとも知らなかった。成程こりゃ尤もだ。実に其通りだ」と主人は無暗に感心して居る。金縁の裏には嘲ける様な笑が見えた。

其翌日吾輩は例の如く椽側に出て心持善く昼寝をして居たら、主人が例になく書斎から出て来て吾輩の後ろで何かしきりにやって居る。不図眼が覚めて何をして居るかと一分許り細目に眼をあけて見ると、彼は余念もなくアンドレア・デル・サルトを極め込んで居る。吾輩は此有様を見て覚えず失笑するのを禁じ得なかった。彼は彼の友に揶揄せられたる結果として先ず手初めに吾輩を写生しつつあるのである。吾輩は既に十分寐た。欠伸がしたくて堪らない。然し切角主人が熱心に筆を執って居るのを動いては気の毒だと思うて、じっと辛

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

棒して居った。彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顔のあたりを色彩って居る。吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乗の出来ではない。脊といい毛並といい顔の造作といい敢て他の猫に勝るとは決して思って居らん。然しいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつつある様な妙な姿とは、どうしても思われない。第一色が違う。吾輩は波斯産の猫の如く黄を含める淡灰色に漆の如き斑入りの皮膚を有して居る。是丈は誰が見ても疑うべからざる事実と思う。然るに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければ褐色でもない、去ればとて是等を交ぜた色でもない。只一種の色であるというより外に評し方のない色である。其上不思議な事は眼がない。尤も是は寐て居る所を写生したのだから無理もないが眼らしい所さえ見えないから盲猫だか寐て居る猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア・デル・サルトでも是では仕様がないと思った。然し其熱心には感服せざるを得ない。可成なら動かずに居ってやり度いと思ったが、先っきから小便が催うして居る。身内の筋肉はむずむずする。最早一分も猶予が出来ぬ仕儀となったから、不得已失敬して両足を前へ存分のして、首を低く押し出してあーあと大なる欠伸をした。さてこうなって見ると、もう大人しくして居ても仕方がない。どうせ主人の予定は打ち壊わしたのだから、序に裏へ行って用を足そうと思ってのそのそ這い出した。すると主人は失望と怒りを搔き交ぜた様な声をして、座敷の中から「此馬鹿野郎」と怒鳴った。此主人は人を罵るときは必ず馬鹿野郎というのが癖である。外に悪口の言い様を知らないのだから仕方がないが、今迄辛棒した人の気も知らないで、無暗に馬鹿野郎呼わりは失敬だと思う。それも平生吾輩が彼の脊中へ乗る時に少しは好い顔でもするなら此漫罵も甘んじて受けるが、こっちの便利になる事は何一つ快くしてくれた事もないのに、小便に立ったのを馬鹿野郎とは酷い。元来人間というものは自己の力量に慢じて皆んな増長して居る。少し人間より強いものが出て来て窘めてやらなくては此先どこ迄増長するか分らない。

我儘も此位なら我慢するが吾輩は人間の不徳について是よりも数倍悲しむべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪許りの茶園がある。広くはないが瀟洒とした心持ち好く日の当る所だ。うちの小供があまり騒いで楽々昼寐の出来ない時や、余り退屈で腹加減のよくない折抔は、吾輩はいつでも此所へ出て浩然の気を養うのが例である。ある小春の穏かな日の二時頃であったが、吾輩は昼飯後快よく一睡した後、運動かたがたこの茶園へと歩を運ばした。茶の木の根を一本々々嗅ぎながら、西側の杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒して其上に大きな猫が前後不覚に寐て居る。彼は吾輩の近付くのも一向心付かざる如く、又心付くも無頓着なる如く、大きな鼾をして長々と体を横えて眠って居る。他の庭内に忍び入りたるものが斯く迄平気に睡られるものか

と、吾輩は竊かに其大胆なる度胸に驚かざるを得なかった。彼は純粋の黒猫である。僅かに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に抛げかけて、きらきらする柔毛の間より眼に見えぬ炎でも燃え出ずる様に思われた。彼は猫中の大王とも云うべき程の偉大なる体格を有して居る。吾輩の倍は慥かにある。吾輩は嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立して余念もなく眺めて居ると、静かなる小春の風が、杉垣の上から出たる梧桐の枝を軽く誘ってばらばらと二三枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はかっと其真丸の眼を開いた。今でも記憶して居る。其眼は人間の珍重する琥珀というものよりも遙かに美しく輝いて居た。彼は身動きもしない。双眸の奥から射る如き光を吾輩の矮小なる額の上にあつめて、御めえは一体何だと云った。大王にしては少々言葉が卑しいと思ったが何しろ其声の底に犬をも挫しぐべき力が籠って居るので吾輩は少なからず恐れを抱いた。然し挨拶をしないと険呑だと思ったから「吾輩は猫である。名前はまだない」と可成平気を装って冷然と答えた。然し此時吾輩の心臓は慥かに平時よりも烈しく鼓動して居った。彼は大に軽蔑せる調子で「何、猫だ？　猫が聞いてあきれらあ。全てえ何こに住んでるんだ」随分傍若無人である。「吾輩はここの教師の家に居るのだ」「どうせそんな事だろうと思った。いやに痩せてるじゃねえか」と大王丈に気焔を吹きかける。言葉付から察するとどうも良家の猫とも思われない。然し其膏切って肥満して居る所を見ると御馳走を食ってるらしい、豊かに暮して居るらしい。吾輩は「そう云う君は一体誰だい」と聞かざるを得なかった。「己れあ車屋の黒よ」昂然たるものだ。車屋の黒は此近辺で知らぬ者なき乱暴猫である。然し車屋丈に強い許りでちっとも教育がないからあまり誰も交際しない。同盟敬遠主義の的になって居る奴だ。吾輩は彼の名を聞いて小々尻こそばゆき感じを起すと同時に、一方では少々軽侮の念も生じたのである。吾輩は先ず彼がどの位無学であるかを試して見様と思って左の問答をして見た。

「一体車屋と教師とはどっちがえらいだろう」

「車屋の方が強いに極って居らあな。御めえのうちの主人を見ねえ、丸で骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫丈に大分強そうだ。車屋に居ると御馳走が食えると見えるね」

「何におれなんざ、どこの国へ行ったって食い物に不自由はしねえ積りだ。御めえなんかも茶畠ばかりぐるぐる廻って居ねえで、ちっと己の後へくっ付いて来て見ねえ。一と月とたねえうちに見違える様に太れるぜ」

「追ってそう願う事に仕様。然し家は教師の方が車屋より大きいのに住んで居る様に思われる」

「箆棒め、うちなんかいくら大きくたって腹の足しになるもんか」

彼は大に肝癪に障った様子で、寒竹をそいだ様な耳を頻り

とびく付かせてあ*らかに立ち去った。吾輩が車屋の黒と知己になったのはこれからである。

其後吾輩は度々黒と邂逅する。邂逅する毎に彼は車屋相当の気焔を吐く。先に吾輩が耳にしたという不徳事件も実は黒から聞いたのである。

或る日例の如く吾輩と黒は暖かい茶畠の中で寐転びながら色々雑談をして居ると、彼はいつもの自慢話しを左も新しそうに繰り返したあとで、吾輩に向って下の如く質問した。「御めえは今迄に鼠を何匹とった事がある」智識は黒よりも余程発達して居る積りだが腕力と勇気とに至っては到底黒の比較にはならないと覚悟はして居たものの、此問に接したる時は、さすがに極りが善くはなかった。けれども事実は事実で詐る訳には行かないから、吾輩は「実はとろうとろうと思ってまだ捕らない」と答えた。黒は彼の鼻の先からぴんと突張って居る長い髭をぴりぴりと震わせて非常に笑った。元来黒は自慢をする丈にどこか足りない所があって、彼の気焔を感心した様に咽喉をころころ鳴らして謹聴して居れば甚だ御し易い猫である。吾輩は彼と近付になってから直に此呼吸を飲み込んだから此場合にもなまじい己れを弁護して益形勢をわるくするのも愚である、いっその事彼に自分の手柄話をしゃべらして御*茶を濁すに若くはないと思案を定めた。そこで大人しく「君抔は年が年であるから大分とったろう」とそそのかして見た。果然彼は墻壁の欠所に吶喊して来た。「たんとでもねえが三四十はとったろう」とは得意気なる彼の答であった。彼は猶語をつづけて「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるがいたちってえ奴は手に合わねえ。一度いたちに向って酷い目に逢った」「へえ成程」と相槌を打つ。黒は大きな眼をぱちつかせて云う。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が石灰の袋を持って椽の下へ這い込んだら御めえ大きないたちの野郎が面喰って飛び出したと思いねえ」「ふん」と感心して見せる。「いたちってけども何鼠の少し大きいぐれえのものだ。此畜生って気で追っかけてとうとう泥溝の中へ追い込んだと思いねえ」「うまく遣ったね」と喝采してやる。「所が御めえいざってえ段になると奴め最後っ屁をこきゃがった。臭えの臭くねえのって夫からってえものはいたちを見ると胸が悪くならあ」彼は是に至って恰も去年の臭気を今猶感ずる如く前足を揚げて鼻の頭を二三遍なで廻わした。吾輩も少々気の毒な感じがする。ちっと景気を付けてやろうと思って「然し鼠なら君に睨まれては百年目だろう。君は余り鼠を捕るのが名人で鼠許り食うものだからそんなに肥って色つやが善いのだろう」黒の御機嫌をとる為めの此質問は不思議にも反対の結果を呈出した。彼は唱然として大息していう。「考げえると詰らねえ。いくら稼いで鼠をとったって――てえ人間程ふてえ奴は世の中に居ねえぜ。人のとった鼠を皆んな取り上げやがって交*番へ持って行きゃあがる。交番じゃ誰が捕ったか分らねえから其たんびに五銭宛くれるじゃねえ

か。うちの亭主なんか己の御蔭でもう壱円五十銭位儲けて居やがる癖に、碌なものを食わせた事もありゃしねえ。おい人間てものあ体の善い泥棒だぜ—さすが無学の黒も此位の理窟はわかると見えて頗る怒った容子で脊中の毛を逆立てて居る。吾輩は少々気味が悪くなったから善い加減に其場を胡魔化して家へ帰った。此時から吾輩は決して鼠をとるまいと決心した。然し黒の子分になって鼠以外の御馳走を猟ってあるく事もしなかった。御馳走を食うよりも寐て居た方が気楽でいい。教師の家に居ると猫も教師の様な性質になると見える。要心しないと今に胃弱になるかも知れない。

教師といえば吾輩の主人も近頃に至っては到底水彩画に於て望のない事を悟ったものと見えて十二月一日の日記にこんな事をかきつけた。

〇〇と云う人に今日の会で始めて出逢った。あの人は大分放蕩をした人だと云うが成程通人らしい風采をして居る。こう云う質の人は女に好かれるものだから〇〇が放蕩をしたと云うよりも放蕩をする可く余儀なくせられたと云うのが適当であろう。あの人の妻君は芸者だそうだ、羨ましい事である。元来放蕩家を悪くいう人の大部分は放蕩をする資格のないものが多い。又放蕩家を以て自任する連中のうちにも、放蕩する資格のないものが多い。是等は余儀なくされないのに無理に進んでやるのである。恰も吾輩の水彩画に於けるが如きもので到底卒業する気づかいはない。

然るにも関せず、自分丈は通人だと思って済して居る。料理屋の酒を飲んだり待合へ這入るから通人となり得るという論が立つなら、吾輩も一廉の水彩画家になり得る理窟だ。吾輩の水彩画の如きはかかない方がましであると同じ様に、愚昧なる通人よりも山出しの大野暮の方が遙かに上等だ。

通人論は一寸首肯しかねる。又芸者の妻君を羨しい抔という所は教師としては口にすべからざる愚劣の考であるが、自己の水彩画に於ける批評眼丈は慥かなものだ。主人は斯くの如く自知の明あるにも関せず其自惚心は中々抜けない。中二日置いて十二月四日の日記にこんな事を書いて居る。

昨夜は僕が水彩画をかいて到底物にならんと思って、そこらに抛って置いたのを誰かが立派な額にして欄間に懸けて呉れた夢を見た。偖額になった所を見ると我ながら急に上手になった。非常に嬉しい。是なら立派なものだと独りで眺め暮らして居ると、夜が明けて眼が覚めて矢張り元の通り下手である事が朝日と共に明瞭になって仕舞った。

主人は夢の裡迄水彩画の未練を脊負ってあるいて居ると見える。是では水彩画家は無論夫子の所謂通人にもなれない質だ。

主人が水彩画を夢に見た翌日例の金縁眼鏡の美学者が久し振りで主人を訪問した。彼は座につくと劈頭第一に「画はどうかね」と口を切った。主人は平気な顔をして「君の忠告に

従って写生を力めて居るが、成程写生をすると今迄気のつかなかった物の形や、色の精細な変化抔がよく分る様だ。西洋では昔しから写生を主張した結果今日の様に発達したものと思われる。さすがアンドレア・デル・サルトだ」と日記の事はおくびにも出さないで、又アンドレア・デル・サルトに感心する。美学者は笑いながら「実は君、あれは出鱈目だよ」と頭を掻く。「何が」と主人はまだ謎わられた事に気がつかない。「何がって君の頻りに感服して居るアンドレア・デル・サルトさ。あれは僕の一寸捏造した話だ。君がそんなに真面目に信じ様とは思わなかったハ、、、」と大喜悦の体である。吾輩は椽側で此対話を聞いて彼の今日の日記には如何なる事が記さるるであろうかと予め想像せざるを得なかった。此美学者はこんな好加減な事を吹き散らして人を担ぐのを唯一の楽にして居る男である。彼はアンドレア・デル・サルト事件が主人の情線に如何なる響を伝えたかを毫も顧慮せざるものの如く得意になって下の様な事を饒舌った。「いや時々冗談を言うと人が真に受けるので大に滑稽的美感を挑撥するのは面白い。先達てある学生にニコラス・ニックルベーがギボンに忠告して彼の一世の大著述なる仏国革命史を仏語で書くのをやめにして英文で出版させたと言ったら、其学生が又馬鹿に記憶の善い男で、日本文学会の演説会で真面目に僕の話した通りを繰り返したのは滑稽であった。所が其時の傍聴者は約百名許りであったが、皆熱心にそれを傾聴して居った。夫からまだ面白い話がある。先達て或る文学者の居る席でハリソンの歴史小説セオファーノの話しが出たから僕はあれは歴史小説の中で白眉である。ことに女主人公が死ぬ所は鬼気人を襲う様だと評したら、僕の向うに坐って居る知らんと云った事のない先生が、そうそうあすこは実に名文だといった。それで僕は此男も矢張僕同様此小説を読んで居らないという事を知った」神経胃弱性の主人は眼を丸くして問いかけた。「そんな出鱈目をいって若し相手が読んで居たらどうする積りだ」恰も人を欺くのは差支ない、只化の皮があらわれた時は困るじゃないかと感じたものの如くである。美学者は少しも動じない。「なに其時や別の本と間違えたとか何とか云う許りさ」と云ってけらけら笑って居る。此美学者は金縁の眼鏡は掛けて居るが其性質が車屋の黒に似た所がある。主人は黙って日の出を輪に吹いて吾輩にはそんな勇気はないと云わん許りの顔をして居る。美学者はそれだから画をかいても駄目だという目付で「然し冗談は冗談だが画というものは実際六ずか敷いものだよ、レオナルド・ダ・ギンチは門下生に寺院の壁のしみを写せと教えた事があるそうだ。なる程雪隠抔に這入って雨の漏る壁を余念なく眺めて居ると、中々うまい模様画が自然に出来て居るぜ。君注意して写生して見給え。屹度面白いものが出来るから」「又欺すのだろう」「いえ是丈は慥かだよ。実際奇警な語じゃないか、ダ・ギンチでもいいそうな事だあね」「成程奇警には相違ないな」と主人は半分降

参をした。然し彼はまだ雪隠で写生はせぬ様だ。

車屋の黒は其後跛になった。彼の光沢ある毛は漸々色が褪めて抜けて来る。吾輩が琥珀よりも美しいと評した彼の眼には眼脂が一杯たまって居る。殊に著るしく吾輩の注意を惹いたのは彼の元気の消沈と其体格の悪くなった事である。吾輩が例の茶園で彼に逢った最後の日、どうだと云って尋ねたら「いたちの最後屁と看屋の天秤棒には懲々だ」といった。

*赤松の間に二三段の紅を綴った紅葉は昔しの夢の如く散って*つくばいに近く代る代る花瓣をこぼした紅白の山茶花も残りなく落ち尽した。三間半の南向の椽側に冬の日脚が早く傾いて木枯の吹かない日は殆んど稀になってから吾輩の昼寐の時間も狭められた様な気がする。

主人は毎日学校へ行く。帰ると書斎へ立て籠る。人が来ると、教師が厭だ厭だという。水彩画も滅多にかかない。タカヂヤスターゼも功能がないといってやめて仕舞った。小供は感心に休まないで幼稚園へかよう。帰ると唱歌を歌って、毬をついて、時々吾輩を尻尾でぶら下げる。

吾輩は御馳走も食わないから別段肥りもしないが、先々健康で跛にもならずに其日々々を暮して居る。鼠は決して取らない。おさんは未だに嫌いである。名前はまだつけて呉れないが、欲をいっても際限がないから生涯此教師の家で無名の猫で終る積りだ。

二

吾輩は新年来多少有名になったので、猫ながら一寸鼻が高く感ぜらるるのは難有い。

元朝早々主人の許へ一枚の絵端書が来た。是は彼の交友某画家からの年始状であるが、上部を赤、下部を深緑りで塗って、其の真中に一の動物が蹲踞って居る所をパステルで書いてある。主人は例の書斎で此絵を、横から見たり、竪から眺めたりして、うまい色だなという。既に一応感服したものだから、もうやめにするかと思うと矢張り横から見たり、竪から見たりして居る。からだを拗じ向けたり、手を延ばして年寄が*三世相を見る様にしたり、又は窓の方へむいて鼻の先迄持って来たりして見て居る。早くやめて呉れないと膝が揺れて険呑でたまらない。漸くの事で動揺が余り劇しくなくなったと思ったら、小さな声で一体何をかいたのだろうと云う。主人は絵端書の色には感服したが、かいてある動物の正体が分らぬので、先っきから苦心をしたものと見える。そんな分らぬ絵端書かと思いながら、寐て居た眼を上品に半ば開いて、落付き払って見ると紛れもない、自分の肖像だ。主人の様にアンドレア・デル・サルトを極め込んだものでもあるまいが、画家丈に形体も色彩もちゃんと整って出来て居る。誰が見たって猫に相違ない。少し眼識のあるものなら、猫の中でも他の猫じゃない吾輩である事が判然とわかる様に立派に描いて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com